

古墳の祭りと吉備－景観史の観点から考える－

東海大学文学部 北條芳隆

はじめに

岡山県古代吉備文化財センターの開所40周年記念シンポジウムにお招き頂き、ありがとうございます。40年前といえば、私は岡山大学の考古学専攻生でした。完成直後のセンターにもお邪魔し、諸先生や先輩方にお世話になりました。そのお礼も兼ねて、本日は現在の私が重視する景観史という観点から、吉備と古墳の祭りとの間の深い関係を取り上げさせていただきます。

サブタイトルに示した景観史とは、集落を営んだ人々は周辺の景観をどう意味づけたのかを探る研究法です。人々が構築したモニュメントの素材にも、天体景観や火山など地上の景観から受ける発想が絡んだ可能性を重視するというものです。過去の人々が抱いた時空間への認知を重視する歴史の見方だともいえるでしょう。こうした観点に沿って弥生時代中期から古墳時代前期にかけての日本列島全体の動向をみますと、吉備が果たした重要な役割がはっきりわかります。本日は経済的な側面で捉えられる動向とも併せて、この問題を論じたいと思います。私の講演は以下の構成となります。

本日の構成

1. 経済的側面にかかわる先駆的な発明
2. 古墳の祭りも吉備で誕生した
3. 巨大前方後円墳の時代の吉備

では次に各項目の要点を略述します。講演では深掘りできない部分もありますので、こちらをお読みいただければ、私が主張したい事柄の補足説明になるかと思えます。

1. 経済的側面にかかわる先駆的な発明

① ナスビ形曲柄鍬

弥生時代中期後半～末（前2世紀）にかけての時期、吉備ではナスビ形曲柄鍬が出現しました。非常に軽量の鍬で、砂浜や低地部の田起こしには優れた性能を発揮することが再現実験からわかっています。ごく単純化すれば、成人女性でも簡単に扱える鍬だといえるでしょう。この点は鳥居貴庸君（東海大院卒・群馬県安中市教委）が解明した重要な研究成果です。

このナスビ形曲柄鍬は、そののち北部九州地域や近畿地方、山陰・北陸地方へと伝わってゆき、古墳時代前期（後3・4世紀）には中部高地の長野盆地を経て、北関東（群馬・埼玉領域）へも波及します。もう一つの系統である鈍重な東海系曲柄鍬が関東地域で駆逐されるのは中期を待たなければなりません。吉備発の軽量鍬は九州・四国と本州全域に波及しました。この地域の先駆性がきわだつ要素の一つだといえるでしょう。

② 土器製塩

弥生時代の中期末には吉備を中心とする瀬戸内沿岸部で土器製塩が始まり、後期（後1・2世紀）には備讃瀬戸地域に定着します。さらに古墳時代前期（後3・4世紀）には



北部九州地域の博多湾沿岸地帯と近畿の大阪湾沿岸地帯に広まりますし、東海の知多半島でも弥生時代終末期には土器製塩が始まったといわれます。つまり吉備発の製塩業は、そののち大きなうねりとなって日本列島各地の湾岸地帯を覆うことになりました。なぜでしょうか。

その背景には鉄資源の獲得があったと私は考えています。鉄素材は朝鮮半島南部、弁辰地域の特産品でした。この時代の鉄は非常に有力な現物貨幣でしたので、それを倭人社会側が入手するためには、同等の交換価値を有する商品を開発して鉄に対抗することが不可欠だったのです。

このとき鉄に匹敵する現物貨幣として倭人社会が確保できる商品とは何だったのでしょうか。自前で調達できる品目の候補としては、石製玉類と稲粃と布地と塩があがります。そのなかから選択された商品のひとつが塩でした。

だから製塩業を活性化させ、塩を量産して貨幣として活用し、鉄素材との交換に投じることを倭人社会は思い立ったのでしょうか。こうした動向を先導したのが吉備でしたから、その重要性は明らかです。なお備讃瀬戸地域での土器製塩は先のナスビ形曲柄鋏の出現とも関連する可能性が鳥居君によって指摘されており、私もその可能性は高いと思います。

③ 広域水田開発

弥生時代中期末から後期前半にかけての東アジア一帯は急速な気候の寒冷化に見舞われました。高緯度地帯の穀物生産は大打撃を受け、中国本土の政情も不安定化し後漢王朝は滅亡して三国時代を迎えます。ただし中国中原地帯と同緯度であっても、温帯モンスーン地帯である日本列島では比較的余裕がありました。水稲は寒冷化への耐性を備えていたからです。

さらに気候の寒冷化に伴う海水準の低下は、それまで潮汐の影響が強く利用しえなかった氾濫平野部一帯を干上がらせました。広大な可耕地へと転じたのです。この点は注目すべき環境要因です。その結果、大規模な広域水田開発が可能になりました。岡山市百間川遺跡群は、こうした弥生時代後期の広域水田開発の実情を私たちに教えてくれる重要遺跡です。

稲の量産は、稲粃に貨幣としての性格を付与する前提条件であり基本要件でしたので、吉備では弥生後期を起点に現物貨幣生産としての稲作が成立したと理解できます。北部九州地域では弥生時代中期に始まった貨幣生産としての水稲農耕ですが、この時期以降、吉



弥生時代の貨幣稲粃と塩と麻布であった

文化人類学における貨幣（限定目的貨幣・現物貨幣）の定義

- (1) 交換単位の明確性
- (2) 交換価値の保蔵性
- (3) 交換の対象となる全品目中の優先的取り扱い
- (4) 交換品目としての需要と供給の安定性

稲粃・塩・麻布

奈良時代の庸・調（中央政府の財源）の主要品目

稲粃（穀）か春米・塩・麻布…

上記の3品目が貨幣としての機能を果たしたのは弥生時代に始まる

備と大阪湾沿岸地帯、それに東海東部の静岡県登呂遺跡や山木遺跡なども加わりました。こうして鉄素材に対抗する現物貨幣生産体制が倭人社会側に備わったといえるのです。

いいかえると後2世紀以降の弁辰の鉄は、吉備産の塩と吉備が加わった稲粃との両商品と対抗せざるをえなくなったのです。折から朝鮮半島側の穀物生産が退潮を余儀なくされた状況ともあいまって、鉄の交換価値はいやおうなく低下する方向へと向かわざるをえなくなりました。こうした動向が決定的となったのは後5世紀前半ですが、その起点としての塩と稲の量産は重要です。これら両通貨をもって朝鮮半島弁辰側と向き合った吉備ですから、この地域の人々が果たした役割の大きさは強調してもしすぎることはないとみるべきでしょう。

2. 古墳の祭りも吉備で誕生した

① 山中他界を実践で示した吉備

弥生時代中期後半になると、吉備の集落は丘陵上に移動します。高地性集落とも呼ばれますが、おそらく洪水が多発する事態となり、平野部での生活は維持しえなくなったことが背景にあったと思います。ただし後期以降は寒冷化しつつも降雨量が安定したこともあって、集落は再度平野部の微高地上に降りてきました。先に述べた百間川遺跡のような広域水田開発が始まったこととも連動して、平野部には安定した水稻農耕の集落景観が広まり、遺跡数が急増することからみても人口増加を招いたのであろうと推測できます。

ここで注目されるのは集落と墓域の立地です。集落は平野部に降りてきた反面、墓域は丘陵上に登ったのです。平野部に広がる可耕地には墓域を設けない、という真に合理的な発想だともいえるでしょう。山への畏怖心などとは無縁な、山を墓域として人為景観に組み込む動きです。

その結果、山中は死者の世界すなわち他界で平野部は生者の世界つまり人界だという、空間上の上下関係ともなる明確な仕切りが出現しました。吉備と同じような変化をみせたのは讃岐・阿波地域や西播磨、出雲や伯耆、丹後や若狭など、近畿地方を除く西日本一帯です。

古代中国を含む東アジア一帯では、死霊は山中に住むと考える山中他界観が一般的だったのですが、日本列島の西方一帯では弥生時代後期になって墓域自体を山中に設けたのです。観念上の他界ではなく現実の行為として死者を山中に葬る事態が起こった事実は非常に重要です。

『古事記』に描かれた「黄泉国探訪譚」を素直に読めば黄泉国は山中であることもわかります。通説が説く、横穴式石室の導入によって日本列島には地下他界としての黄泉国の観念が朝鮮半島から伝わったという解釈は単純な誤読です。山中他界観はもっと古い時代から定着しており、そこに横穴式石室墳=出入り可能な「殿」が設けられたと読み解く

垂直構造をなす山中他界観

「黄泉国」=山中 「殿」=両国の境界

「根の堅州国」=山中の地下

火山を頂点に「黄泉国」は序列化されていた可能性がある



昇龍

黄泉国

殿

根の堅州国

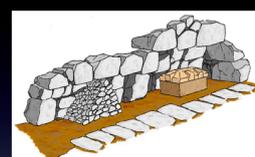
殿

草原中国

殿

現実の景観上「昇龍」が想起される火山列島ならではの他界・冥界観

では横穴式石室とはなにか



「黄泉国」内に累々と築かれた「殿」であり、個別の死者が永眠する空間を指す。



黄泉国

殿 殿 殿

「国」である以上は領域的な広がりやを想定すべき

ただし、個別の「殿」内部は暗黒の空間であり、そこが地下世界への入り口として構想された可能性は否定できない

のが正解なのです。

つまり山中他界の観念を現実の葬送行為としていち早く実演してみせた、という意味において、吉備を含む西日本一帯の弥生後期社会は、山中他界観を強化する役割を果たしたといえるのです。そしてこの動向は、吉備の弥生墳丘墓がもつ特殊性ともかかわってきます。

② 楯築弥生墳丘墓は火山の造形

火山の火口から被葬者が龍に転生して天に飛翔する姿をモニュメント化した弥生後期後半（後2世紀末）の墳墓、それが倉敷市の楯築墳丘墓だと私は考えます。前方後円墳は人工の火山だと説いたのは古代・中世史の保立道久先生（東京大学）です。楯築の弧帯石（大）は人面龍体の造形だと説いたのは春成秀爾先生（国立歴史民俗博物館）です。これら二つの説を合体させれば上記の解釈が成立するのです。墳頂部で長らく伝世した弧帯石（大）の周囲を巨大な立石が囲みますが、それは火口から昇る噴煙や、火口湖から飛び散る水飛沫の造形だとみた場合に合理的な説明が可能です。

山中他界を基礎に特別な山を選定すれば、筆頭候補は火山となります。だから吉備の特別な人物を葬るべき場所は火山において他になかったともいえるでしょう。この時期、中国側から龍の観念が伝来したことがわかっています。矢部遺跡出土の龍の土製品は非常に写実的ですので、吉備の弥生後期人は龍についての知識を身につけた可能性が高いと推定できます。龍は王権の象徴でもあり、天空を飛翔し人界と仙界を往来する聖獣でした。こうした龍への知識を背景に、王の魂を龍に転生させて仙界との往来を祈念する祭祀、それが楯築墳丘墓の祭りであったと考えます。火山の情報は豊後水道「貝の道」を伝い、九州の東海岸経由で吉備に伝わりました。こうして龍と火山は吉備で融合を果たし、龍王の誕生祭が完成したのです。そののち吉備地域社会の始祖として崇められるべき王への就任儀礼、これが古墳の祭りの原型でした。

「龍王」の具体的なイメージの源泉と楯築墳丘墓



「龍王」は噴煙とともに天空に昇る火山は「龍王」の住み処に相応しい



保立道久氏の〈前方後円墳=火山の造形〉説
春成秀爾氏の〈楯築弧帯文石=人面龍体〉説

龍に転生させた死者を火山から飛翔させる装置であった可能性

最初の「王」の就任儀礼は吉備の楯築弥生墳丘墓で完成し実演された



遺骸を「龍王」に就任させる即位儀礼であった可能性が高い「龍王」の象徴としての弧帯文石

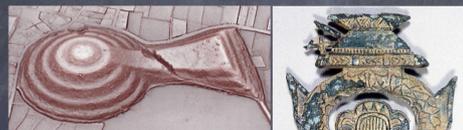
多数の巨石を運び上げる空前絶後の造営事業

瀬戸内海沿岸部に残る濃厚な南方系の要素



香川県観音寺市鹿隈式石棺墓群8号（古墳時代前期中葉）

前方後円墳は王の即位儀礼の場であったという理解の背景（倭人の死生観と他界観）



生は死の準備期間であったとみなされた地域社会の实在（高句麗系神は祖霊であり、祖霊祭祀が王権祭祀の根本であった実例（殷代）

墓と理解するには過剰な荘厳さに仕上げられた前方後円墳簡素で質素な「首長居館」

前方後円墳に埋葬された時点で「遺骸」は王に就任するという観念新規に築造された「特殊他界」に棲み、子孫を繁栄させる王



都出比呂志先生が提唱されたタタキ甕の制作技法を実験を通して確かめる

底部輪台技法
口縁部叩き出し技法

両者ともに再現可能

口縁部叩き出し

底部輪台と口縁部叩き出し
布留式甕



底部輪台技法と口縁部叩き出し技法は他の小形器種の成形にも応用可能

しかも一体成形で簡単！

一体成形小形丸底壺



楯築弥生墳丘墓出土土台付直口壺

吉備地域で誕生した可能性

③ タタキ技法で作られた小形精製土器

楯築弥生墳丘墓の築造に起源をもつ古墳の祭祀ですが、高坏や小形丸底壺などの精製土器も多量につくられ埋葬祭祀にもちいられました。それが古墳時代前期になると日本列島の広い範囲に広まり、いわゆる「小形精製三種」土器群となりました。

その成形技法ですが、タタキ成形で作られた可能性の高いことが最近わかってきました。「口縁部叩き出し技法」は都出比呂志先生（大阪大学）によってタタキ甕の成形技法として提唱されました。しかしそれはタタキ甕に限らない広範囲への応用が可能な成形技法なのです。

叩き込んだ素材の口縁部付近を叩き出せば甕になりますが、中間付近を絞り込んで、そこから下方を丸く仕上げれば直口壺となります。また下半部を絞り込み、下方を丸く仕上げれば小形丸底壺や罎になるのです。屈曲口縁鉢は腕状に叩き込みますが、これもタタキ技法による一体成形です。

さらに坏部と脚部を組み合わせる器台や高坏を含め、古墳時代前期の祭祀用の器種の多くはタタキ技法によって成形された可能性が濃厚で、どの器種も器壁は非常に薄く3mm以下となります。なお器台や高坏の脚部内面には鉄製工具によるへら削りが施される場合があります。

こうしたタタキ技法と内面へら削り技法の起源地として注目されるのも吉備なのです。墳丘墓や古墳の祭祀は、王や地域首長の埋葬祭ですので、対象者と参加者は限定されていました。しかし「小形精製三種」土器群は集

落の住居内でも祭祀や宴会の席で使われました。ですから新しい時代の到来を民衆が手のひらで実感することができた薄くとても軽い容器、それが「小形精製三種」土器群だったのです。ようするに吉備発の古墳の祭祀は、民衆側へのアピールも欠かさなかったといえるでしょう。

3. 巨大前方後円墳の時代の吉備

① 造山古墳の方位と築造法

岡山市造山古墳は全国第4位の規模をもつ巨大前方後円墳です。ただし第1位の大阪府堺市大仙陵古墳（伝仁徳陵）と第3位の同市石津丘古墳（伝履中陵）とは、前方部の向きつまり墳丘

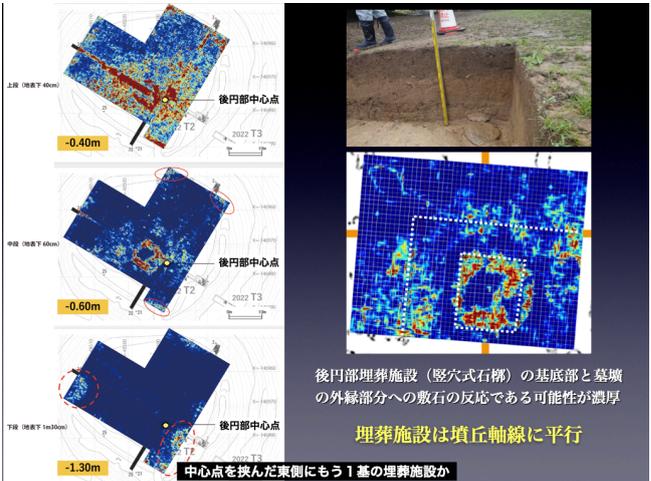
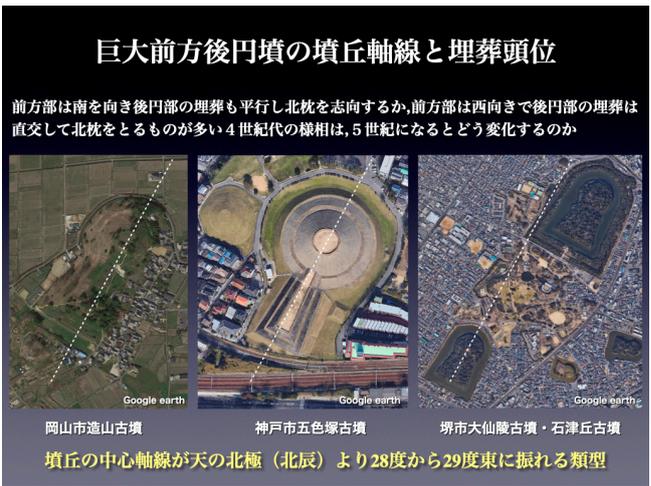
中軸線は厳密な意味で一致しています。それはこの時代の北斗七星が建つ方位でした。しかもこの方位を直交させると冬至の日の出方位、夏至の日の入り方位となります。古相の日の出・日の入り信仰と新相の北辰信仰を同調させた折衷的な方位観念ですが、こうした方位設定にかかわる微細な情報が畿内の大王墓と吉備の王墓との間で共有されていたのです。東海大学が2回にわたって実施した造山古墳後円部への地中レーダー探査結果をみても、埋葬施設は墳丘軸線と平行するものであったことがわかりました。

さらに石津丘古墳と造山古墳の基本設計（築造企画）と規模が一致する事実も重要です。こうした状況からも、吉備の地域勢力は倭王権の中枢と緊密な関係にあったことがわかります。

しかし造山古墳の特殊性は、墳丘のほぼ全体が地山を削り出して成形された事実にあります。後円部の頂上でも盛土の厚さは2.5m前後しかなかったので、周辺の土を掘って盛り上げたのではなく、自然の山を前方後円形に削り込むといった、いわば彫刻にもなぞらえられるべき造形だったのです。奈良盆地では後4世紀初頭に完成した奈良県桜井市の桜井茶臼山古墳が同様の「彫刻」によって墳丘全体を成形したことがわかっています。驚くべき実情です。

自然の山を掘削するわけですから、上方から下方に向けての削り込みと整形を繰り返す工程となり、特殊な技術が必要だったに違いありません。とはいえ下方から上方に向けて墳丘を盛り上げるよりも格段に安く済んだことも確実なので、経費節減だとみるべきでしょう。もちろん余った削土の処理も必要だったはずですから周溝はありえません。削土（排土）は周堤と陪冢の造成土に転用された可能性が指摘できます。

その意味では畿内地域のような、完成後に水を湛えた壕を全周に巡らせる巨大前方後円墳の姿にはなりえず、墳丘だけを大王墓級の規模に仕立て上げることで妥協した、後5世紀



前半代の吉備地域勢力の力量が浮かび上がってきます。総社市作山古墳も同様の状態で、赤磐市両宮山古墳になって初めて、墳丘全体を周溝で巡らす巨大前方後円墳が吉備地域にも誕生しました。

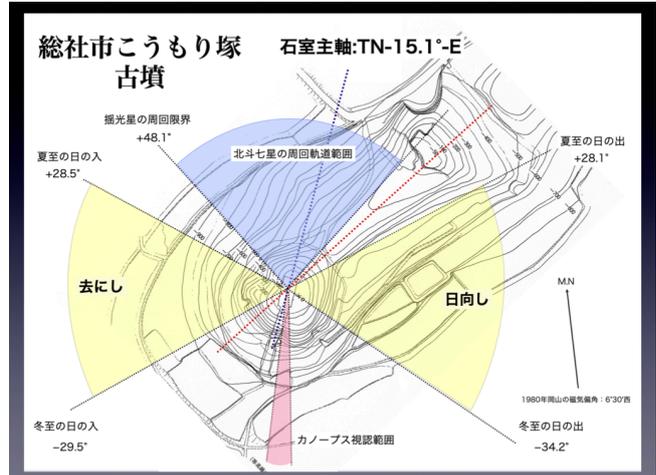
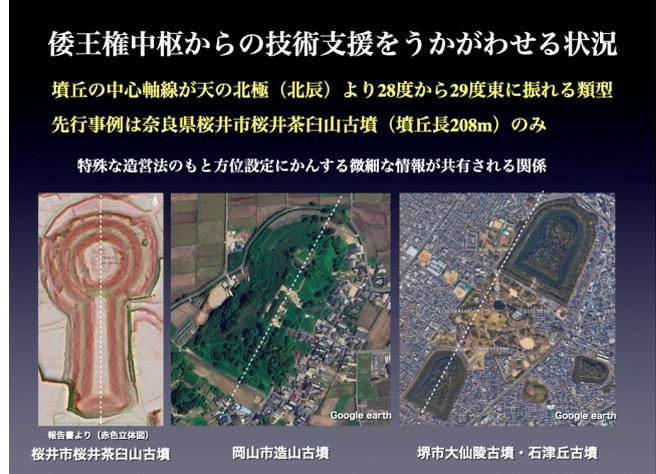
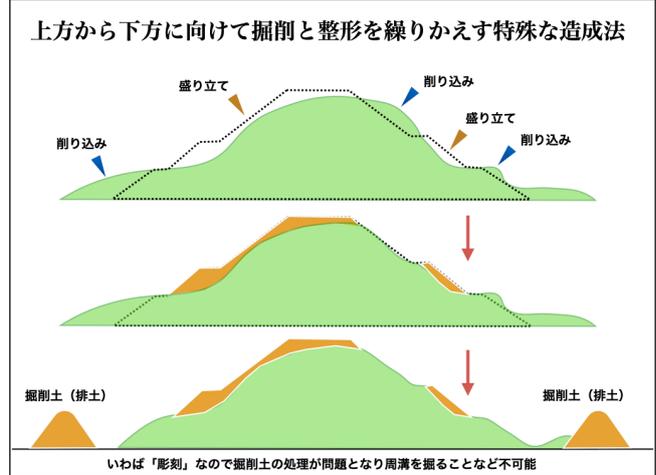
いわゆる「倭の五王の時代」における吉備地域の勢力は、これまで倭王権の中核と同等な実力を有したとも指摘されてきました。しかし実態をみると、そうでもないようです。むしろ大王家との姻戚関係にもあったとされる吉備地域の勢力を擁護し、大王墓に匹敵する規模の古墳に仕立て上げる必要性ゆえに、倭王権は造山古墳の造営に技術的な支援を惜しまなかったとみたほうが合理的な説明になるかと思えます。

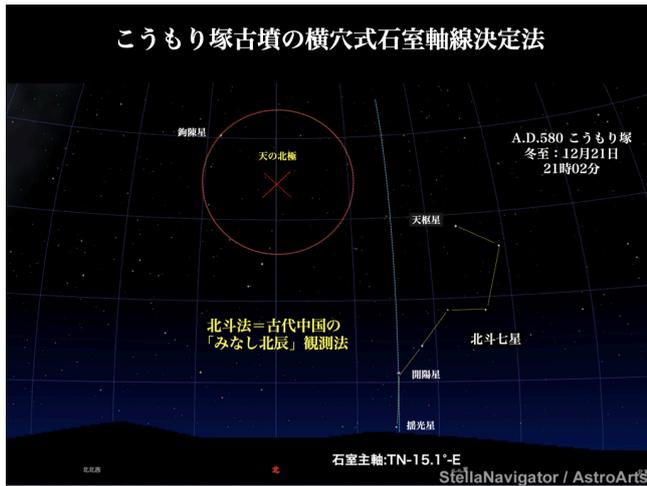
② 見瀬丸山型前方後円墳としてのこうもり塚古墳

後6世紀後半の吉備と倭王権中核との密接な関係は、総社市こうもり塚古墳が証明しています。土生田純之さん（専修大学）が提唱した「見瀬丸山型前方後円墳」だからです。金田善敬さん（古代吉備文化財センター）が指摘するとおり、全長96mのこの古墳は奈良県橿原市の見瀬丸山（五条野丸山）古墳の1/3規模墳です。鳥根県出雲市大念寺古墳や長崎県壱岐市双六古墳と対馬塚古墳、福岡県福津市在自剣塚古墳、熊本県大野窟古墳、愛知県豊橋市馬越長火塚古墳など、ほかにも約10基の前方後円墳が「見瀬丸山型前方後円墳」に分類されることがわかっています。

見瀬丸山古墳は日本列島における最後の巨大前方後円墳で、墳丘長は310mもあり全国第6位、その被葬者は欽明天皇（大王）であることも確実視されています。この欽明大王が活躍した時期、朝鮮半島南部の政情は緊張した局面を迎え、百済と新羅は加耶の覇権を巡って争い、結局562年に加耶は新羅に併合されました。

こうした情勢下、危機感を抱いた百済の聖明王から欽明大王には、仏教や経典類をはじめとする各種の贈与財が提供され、見返りに





百済への援軍派遣が要請されました。もちろん新羅からもさまざまな働きかけが九州や日本海沿岸部の諸地域勢力に向けてなされた可能性は高いとみるべきでしょう。父親の継体大王の時期に磐井の乱が引き起こされた背景とよく似た構図です。吉備地域の勢力も以前から加耶とは密接な関係にあり、利権を保持した経緯もあります。

それゆえ欽明大王は、朝鮮半島側からの働きかけを監視し倭王権の意向を代行する地域勢力の確保を目論んだに違いありません。見瀬丸山型前方後円墳の分布が壱岐や宗像、筑

紫の一部、出雲や有明海沿岸といった対外交通の要所に偏ることは、このことを雄弁に物語っています。そのなかにこうもり塚古墳が含まれることの重要性は明らかです。欽明大王からは警戒されつつも緊密な連携を期待された、吉備地域勢力の姿が浮かび上がってくるのです。

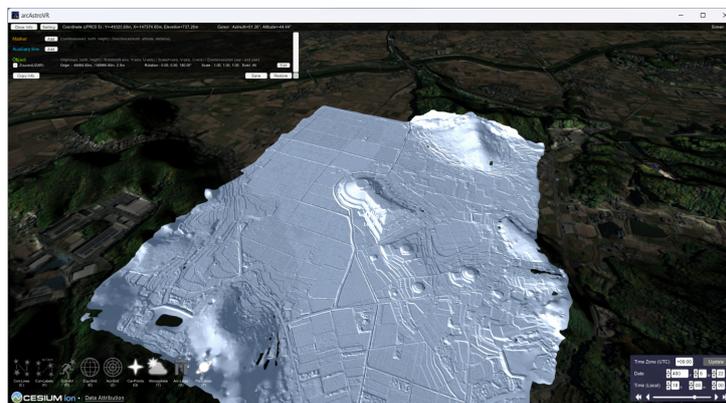
まとめ

以上、経済的側面と景観史的側面を重視しつつ、古墳の祭りの成立にあたって吉備がいかに重要な役割を果たしたのかを略述しました。古墳時代の中期や後期にも、倭王権の中核とは緊密な関係を取り結んだ吉備の姿を簡単にみてきました。

北部九州地域から奈良盆地に拠点を移すことによって成立した新生倭王権ですが、それは中国や朝鮮半島との交流・交易をそれまで以上に円滑に進め、相手側から正当な法人格としての承認を受けるためには必要不可欠な施策だったのです。吉備も鉄資源の確保に向けては筑紫と同様、積極的に動きましたので、とくに現物貨幣生産の定着にあたり、新生王権は吉備を取り込む必要があったと考えられるのです。

とはいえ楯築墳丘墓の特殊性をみると、筑紫王権とは別建ての吉備王権を備中地域に誕生させようとした形跡が明確です。しかし後には続きませんでした。

さらに吉備的な要素を引き継ぐ最古の巨大前方後円墳である奈良県桜井市箸墓古墳には、吉備本来の伝統からの逸脱があり、換骨奪胎とでもいふべき様相が認められます。箸墓古墳の1/2規模墳である岡山市浦間茶白山古墳も備中ではなく備前に築かれました。こうした状況をどう読み解くべきかが今後に残された課題です。ご静聴に感謝します。



arc Astro VRは国立天文台HPからダウンロード可能です。興味ある方はご利用ください